

中国語敬辞体系の衰退プロセス

— 言語と社会の通時的共振性 —

彭 国躍 (金沢学院大学)

ディスクリプタ: 敬辞体系 敬語意識 社会的変遷

通時的共振性 言語変化の他律性

1. 研究の目的

伝統的な中国社会においては、「天地、昼夜、暑寒、明暗、上下、大小、善悪、尊卑、貴賤、盛衰、賢愚…」などすべての対立概念を「陰陽」モデルによって統合的に解釈する世界観、価値観が存在していた。「天、昼、暑、明、上、大、善、尊、貴、盛、賢…」などは陽で、「地、夜、寒、暗、下、小、悪、卑、賤、衰、愚…」などは陰である。そして、近代中国語には、このような「陰陽」の二項対立構造を基本モデルとし、その価値的含意を意味論的根拠とする体系的な敬語システムが存在していた。「陽」のカテゴリーに属しプラスの価値を含意する表現は「尊辞」つまり尊敬表現として相手に対して使われ、「陰」のカテゴリーに属しマイナスの価値を含意する表現は「謙辞」つまり謙讓表現として自分に対して使われていた。尊辞と謙辞を含めたこのような敬語表現のことをここで「敬辞」または「敬辞表現」と呼ぶ(敬辞の記述研究について詳しくは彭1993, 1995aを参照)。しかし、現代中国語において、近代に見られた体系的な敬辞表現はほとんど姿を消し、使用されなくなった。中国語敬辞体系の衰退と崩壊は具体的にいつ、どのようにして行われたかということは、通時論の観点から見て極めて興味深い問題である。

従来の比較言語学や構造言語学において、言語はそれ自体の構造的力学によって成り立つ自己充足的な体系として捉えられていた。言語の通時的変化は、純粹に言語構造の内部で自律的に起こる現象として考えられていた(Bloomfield 1933, 福島1934)。ところが、60年代以後社会言語学の研究において、言語変化が言語外の社会的構造や社会意識の変化

に敏感に反応し、それに連動する他律的な側面が多く指摘されるようになった。言語の共時態の変異現象と様々な社会的変数との関係を記述することにより、言語変化の通時的な過程を捉える試みがなされるようになった(Labov1963, 真田1979, 井上1985)。しかし、言語変化の他律性の問題、言語の通時的变化と社会の歴史的变化との関係については、まだ十分な研究がなされたとは言えず、解明されるべき課題が数多く残されている。

この論文は実証研究の立場から、中国語敬辞体系の崩壊が始まる時期、敬辞表現が具体的に減少し、消滅していくプロセス、そして、敬辞体系崩壊の背景と原因などを探りながら、言語と社会の通時的共振関係を明らかにし、言語変化の他律性の問題に光を投げたいと思う。

2. 調査方法

敬辞には、「貴国<貴い国/お国>」のような性状概念を表す形容詞型のものや、「拜問<拜んで聞く/お聞きする>」のような動作、行為概念を表す動詞型のもの、そして「椿庭<椿樹の庭/お父さん>」のような事物概念を表す名詞型のものなどが含まれる。その内形容詞型敬辞は最も多く使われ、意味的にも二項対立の価値含意を最も明確に表し、敬辞のプロトタイプとしての特徴を持っている。今回の調査対象は形容詞型敬辞にのみ限定する。

調査の手順は、まず調査対象となる文学作品の会話文に現われたすべての敬辞表現を調べ、その中から形容詞型の尊辞と謙辞を抽出する。そして抽出された尊辞と謙辞の中からそれぞれ最も多く使用された上位20位のを切り取る。そして、各作品におけるこれらの尊辞と謙辞の分布状況とその時代的推移を観察し図表化する。次に最も多く使用された上位1位の尊辞と謙辞に焦点を絞り、それと共起するすべての語彙を調べることにより、各作品における敬辞の前置限定詞としての修飾機能、その共起語彙の範囲における時代的变化をより具体的に観察する。それから近代中国社会の歴史的变化を概観し、全作品に現れた敬辞の時代的变化と現代まで約700年の間に起こった中国社会の歴史的变化とを照らし合わせながら、両者の間に現れた通時的相関関係を明らかにする。

敬辞の個々の表現がそれぞれどのような場面で、どのような人間関係において使われたかという具体的なコンテキストの研究(彭1995b, 1996aを参照)もきわめて重要であるが、ここでは個々の発話が置かれた具体的なコンテキスト条件を捨象し、約700年間における敬辞の歴史的变化の全体像を浮き彫りにすることを目的とする。言語使用の個々のコンテキスト条件の研究を微視的な視点とすれば、ここではそのもう一つの視点つまり巨視的な

視点を積極的に導入し、長いタイムスパンにおける敬辞の通時的变化の鳥瞰図を描くことに努めたい。

3. 調査対象

調査対象となるテキストの選定は、次のような条件に基づいて行われた。

<1> この調査は14世紀から20世紀90年代までの間に書かれた口語体長編小説のみを対象とする。中国小説の源流を辿れば、唐、宋時代（618年～1275年）にまで溯ることができる。しかし、その時代の小説は文体的には擬古体（文言）で書かれたものが中心で、そのことは使いは当時の話しことばとはかなり掛け離れていたと見られる。元の時代（1279年～1367年）以降になると、話しことばによる口語体（白話）小説が多く現れた。元、明、清時代は、擬古体小説と口語体小説が併存していた時代である。中華民国時代（1912年～1949年）に入ってから、擬古体小説が絶え、口語体小説だけが存続した。この調査は文体上の差を避けるために近代（元、明、清時代）から現代にかけて書かれた口語体小説のみを対象とする。¹⁾

<2> 同一作者の作品は一点に限定する。

<3> 小説の題材には、歴史物語、怪異物語、恋愛物語、勇俠物語、社会風刺小説など様々なジャンルのものが含まれるが、ここではできるだけ各時代の写実的な作品を選ぶ。但し、16世紀以前は資料が限られているため、選択の幅を広げる。

<4> 各時代の作品をできるだけバランスよく選定する。20世紀に入ると小説の量が急増し、選択の幅が広がるので、敬辞表現の時代的推移を細かく観察するために、年代毎に最少一点の作品を入れる。

以上の条件のもとで選定された30点の作品は表1の通りになる。各作品は、時代が異なると同時に、作者、地域、作品の題材内容、作品の長さなど様々な側面においても条件が異なっている。そして敬辞の使用には作者自身の言語習慣や表現手法、話題内容、登場人物間の人間関係など様々な偶然要素が絡んでくる。ここで比較調査に好都合な均質性の条件を揃えることはほとんど不可能である。多くの条件が異なる各時代の作品の間で、はた

1) 中国では「近代」という用語の定義について、歴史学と言語学とは区分の時期が異なり、一般的に前者はアヘン戦争(1840)から中華人民共和国成立(1949)までとし、後者は主に元、明、清時代(1279～1911)を指す。ここでは言語学における「近代(中国語)」の概念に従う。

して通時的な比較調査が可能なのか、ここでは時代の幅を広げ、調査対象の量を増やすことによって、各作品間に見られる敬辞使用の個別差、偶然性をカバーし、そこに意味ある通時的変化の傾向性、必然性を見いだそうと試みる。

表1 調査対象リスト

作品	作者	成立年代	版本(底本)	新版	字数(千)
①三国演義	羅貫中	1320*	大魁堂蔵板刻本	齊魯書社	1991 955
②水滸伝	施耐庵	1560*	貫華堂刻本	上海古籍出版社	1991 589
③西遊記	吳承恩	1570*	世徳堂本	上海古籍出版社	1991 846
④金瓶梅詞話	蘭陵笑笑生	1600*	万曆丁巳版	増休智文化事業	1976 1015
⑤玉嬌梨	夷荻散人	1640*	清初刻本	春風文芸出版社	1981 132
⑥醒世因縁伝	西周生	1710*	亜東排印本	上海古籍出版社	1981 955
⑦儒林外史	吳敬梓	1730	臥閑草堂刊本	上海古籍出版社	1991 383
⑧紅樓夢	曹雪芹, 高鶚	1750	庚辰本, 程甲本	人民文学出版社	1992 1075
⑨駐春園	吳航夜客	1780*	乾隆48年版	春風文芸出版社	1985 96
⑩蜃楼志	虞嶺勞人	1800*	嘉慶9年刻本	齊魯書社	1988 189
⑪鏡花縁	李汝珍	1818	嘉慶23年蘇州刊本	上海古籍出版社	1991 494
⑫品花宝鑑	陳森	1836	幻中了幻齋本	上海古籍出版社	1994 570
⑬兒女英雄伝	文康	1849	東亜図書館32年版	十月文芸出版社	1995 612
⑭小五義	石玉昆	1885	文光楼初刻本	漓江出版社	1981 484
⑮官場現形記	李宝嘉	1905	光緒29年世界繁華報	人民文学出版社	1957 790
⑯九尾魚	張春帆	1910	宣統点石齋本	上海古籍出版社	1994 922
⑰啼笑因縁	張恨水	1929	1930年三友書社版	浙江人民出版社	1980 323
⑱家	巴金	1931	1933年版	四川人民出版社	1995 320
⑲子夜	茅盾	1932	1933年開明書店	人民文学出版社	1994 347
⑳圍城	錢鍾書	1946	1947年版	人民文学出版社	1980 253
㉑暴風驟雨	周立波	1948		花山文芸出版社	1995 377
㉒青春万歳	王蒙	1953		人民文学出版社	1979 226
㉓白浪河上	于良志	1956		山東人民出版社	1956 172
㉔艷陽天	浩然	1965		人民文学出版社	1966 831
㉕征途	郭先紅	1973		上海人民出版社	1973 462
㉖創業	張天民	1977		中国青年出版社	1977 430
㉗人啊人	戴厚英	1980		花城出版社	1980 250
㉘平凡の世界	路遥	1988		華夏出版社	1994 1063
㉙橋	譚淡	1991		作家出版社	1991 302
㉚白夜	賈平凹	1995		花夏出版社	1995 305

*印が付いた作品の具体的な成立年代については諸説があるので、ここでは一般的に受け入れられるその時代の目安を示す。16世紀以前の作品は一人の作者が創作したと言うよりも、当時の伝説や説話などに基づいてまとめられたと理解した方が適切かもしれない。

4. 敬辞の分布と通時的変化

まず各作品に現れたすべての敬辞を調べ、その中から形容詞型の尊辞と謙辞の上位20位を切り取る。各作品におけるその分布状況を調べ、それを表にまとめる。個々の敬辞表現が全作品の内のどれかに現れた場合、一つの作品内での出現頻度に関係なく、その作品で

の使用を認め、●印によってその分布状況を示す。表の空白の部分はその敬辞の当該作品での使用がまったく見られなかったことを意味する。

4.1 尊辞

調査結果では全作品の中で最も多く現れた上位20位の尊辞は「貴、尊、令、大、賢、高、盛、厚、清、上、雅、芳、明、美、鈞、聖、良、威、華、豊」である。各作品での分布状況は表2のようになる。それによると、上位20位の尊辞のほとんどは①から⑭までの作品に現れ、その内「貴」から「高」までの上位6位の尊辞は①から⑭までのすべての作品に現れ、その時代に尊辞が多用されている姿が窺われる。14世紀から20世紀初頭までの間に尊辞の出現状況において作品による個別差はあるが、大きな時代的相違と変化は見られない。作品⑮以後尊辞の使用は明らかに減少し、⑳からはほとんど「貴」しか現れなくなった。㉑以降つまり今世紀60年代になると、尊辞がまったく見られない作品も現れ、尊辞現象が消滅寸前にまで衰退した姿を見て取ることができる。この調査で尊辞は作品⑮と⑰の間、そして㉑と㉒の間に二回大きな減少傾向が観察される。

表2 各作品における尊辞分布図

尊辞	14~17世紀					18世紀			19世紀							20世紀														
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚
貴	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
尊	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
令	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
大	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
賢	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
高	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
盛	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
厚	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
清	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
上	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
雅	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
芳	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
明	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
美	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
鈞	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
聖	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
良	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
威	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
華	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
豊	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

4.2 謙辞

各作品に出現した謙辞の上位20位は「敝、小、愚、賤、薄、寒、微、拙、貧、卑、下、

鄙, 浅, 窮, 荒, 劣, 寸, 俗, 粗, 淡」である。全作品に現れた上位20位の謙辞の分布状況は表3の通りになる。表3の調査結果によると, 謙辞上位20位は主に作品①から⑬までの間にばらつき, 14世紀から19世紀の中頃あたりまでの間では, 謙辞の分布状況には大きな変化が見られない。作品⑮以降つまり20世紀の初頭から上位12位「鄙」以下の謙辞が現れなくなり, 上位1~11位の謙辞も徐々に減少し始めた。作品⑳以後つまり今世紀中頃から, 謙辞はほぼ完全に姿を消し, 表2の尊辞よりも急速に衰退した傾向を見せている。

表3 各作品における謙辞分布図

謙辞	14~17世紀					18世紀				19世紀					20世紀															
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚
敵	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
小	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
愚	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
賤	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
薄	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
寒	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
微	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
拙	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
貧	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
卑	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
下	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
鄙	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
浅	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
窮	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
荒	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
劣	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
寸	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
俗	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
粗	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
淡	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●											

中国語敬辞の特徴の一つはその意味的含意性である(詳しくは彭1993を参照)。つまり, 敬辞はその語が持っている文字通りの意味に基づいて派生された二次的価値含意の上に成り立っているものである。敬辞として使われた表現は, 対人関係の文脈を離れば, すべてその語本来の文字通りの意味として使うことができるものばかりである。したがって, 敬辞が20世紀に入ってからだんだん使用されなくなったということは, これらの表現がしだいに敬語として機能しなくなったことを意味するもので, 決してこれらの表現が通常の文字通りの意味としても使用されなくなったことを意味するものではない。この点では, 「給う」, 「侍り」, あるいは「お~なる」, 「お~する」などのように特定の形態によって記号化された直示型の日本語の敬語とは性質が異なる(井出・彭1994, IDE/PENG1996)。

日本語の敬語の変化には、古い形態そのものが消失するか、または別の新しい形態に取って代わられる傾向がある。

5. 敬辞共起語彙の通時的变化

以上表2と表3の調査で、敬辞そのものが各作品に使用された場合の時代的变化が見えてきた。しかし、これだけでは同一敬辞が各時代に現れた場合の使用状況の差、つまりずっと使用され続けていた敬辞がどの時代に、どんな語彙と共起するか、その共起語彙の範囲における通時的变化を観察することはできない。この節では全作品の中で最も多く使われた上位1位の尊辞と謙辞に焦点をあて、その敬辞と共起した語彙を調べることにより、敬辞の修飾機能における通時的变化を明らかにしたい。

5.1 尊辞「貴」の共起範囲

各作品の中で上位1位の尊辞「貴」と共起するすべての語彙の分布状況を表4のようにまとめる。前節の表2では、尊辞「貴」が時代的にもっとも広く使われ、②⑤、⑦⑩、⑫⑬、⑮⑯を除いた他のすべての作品に分布していることが分かったが、表4では更に新しい事実が見えてきた。表4で「貴」と共起する語彙の範囲は、作品による個別差はあるものの、全体として作品①から⑩まで徐々に縮小していく傾向が現れている。作品⑩つまり今世紀の半ば以後は「姓」という一つの語だけとなっている。時代が下がるにつれて、表2で見られるように作品全体に使用された尊辞の数が減少するだけでなく、表4が示すように各時代にずっと使われ続けた尊辞にも、その修飾機能、共起語彙の範囲が縮小していく傾向がはっきり観察される。

作品⑦と⑩において「貴」と共起する語彙は他の作品より著しく多く現れている。作品⑦は科挙の試験をめぐる18世紀当時の読書人の世界を描くもので、作品⑩は19世紀末期の官僚の世界を題材とするものである。「衙門、班、老師、房師…」、「国、政府、親王、大臣、領事、総督…」など、その共起語彙の意味内容からも推測できるように、これらの作品の中で「貴」の共起語彙が多いのはインテリや官僚の世界を描くその作品の内容による影響が大きい。⑦と⑩に現れた現象を通して20世紀の初め頃まで「貴～」はインテリや官僚など中国の教養層社会の間で多用され、一種の位相語としての特徴を呈していることが分かる。「貴」には、敬辞全体がよく使われていた20世紀初め頃までの間にこのような位相差の傾向が見られるが、20世紀に入ってから⑫⑬のように同じインテリや官僚の世界を描く作品でもこのような位相差が現れなくなった。つまり、時代が下がるにつれ

て、社会的階層間に見られる敬辞使用の位相差も縮小していった側面が窺われる。

表4 尊辞「貴」の共起語彙

尊辞	14~17世紀						18世紀			19世紀						20世紀															
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	
「貴」	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	
	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志	志
	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体
	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處	處
	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷	郷
	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名	名
	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地
	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手
	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足
	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅	宅
	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾

5.2 謙辞「敝」の共起範囲

各作品の中で最も多く現れた謙辞は「敝」である。「敝」と共起する語彙は、表5に示されたように、位相差の激しい作品⑦と⑮を除いて、作品①から⑯までつまり14世紀から20世紀初め頃までは全体の流れとして緩やかな減少傾向が見られる。20世紀に入ってから作品⑯、⑲と⑳ではいずれも一つの語としか共起せず、共起範囲が急速に縮小した様子が見られる。そして、作品㉑以後つまり今世紀半ば頃から共起語彙が完全になくなった。尊辞「貴」と同じように、謙辞「敝」においても作品⑦と⑮は、同時代の他の作品との間に位相差と思われる顕著な差が現れているが、20世紀に入ってから同じインテリや官僚の世界を題材とする小説⑳、㉑にはこのような位相差が見られなくなった。表3と表5の調査結果を合わせて考えると、謙辞「敝」は、作品⑯以後つまり20世紀10年代に入ってから共

起語彙が急激に減少すると同時に、社会的位相による差もなくなり、「敝」それ自身も速いスピードで使用されなくなり、消え失せたことが分かる。

表5 謙辞「敝」の共起語彙

謙辞	14~17世					18世				19世					20世															
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚
「敝」	東	如	地	門	府	東	如	友	如	如	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
	庄	門	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解
	寺	邦	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城
	桑	村	府	山	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地
	郷																													

表2, 3, 4, 5の調査を通して、敬辞の衰退は、その語数の減少と修飾機能の低下、そして位相差の消失という三つのレベルにおいて起きたことが明らかになった。

謙辞表現が敬辞体系全体の崩壊と同時にほぼすべて消えたのに対して、尊辞表現は敬辞体系が完全に崩れた後も、「貴姓」という個別現象として20世紀90年代の今まで使われ続けている。この現象から、敬辞に基づく敬語行動においては、自己に対する卑下よりも、相手に対する尊敬、尊重の方がより重要で、その表現もより長く持続する一面が窺われる。

6. 近現代中国社会の変化

敬語現象は、音韻現象や文法現象と並んで言語現象の一側面である。しかし、敬語は人間関係を表すために宿命的にその言語社会の構造や価値観や人間関係の理解の仕方などに密接にかかわらざるを得ない。それゆえ、敬語表現の時代的变化も、社会の変化とりわけその社会での価値観や人間関係に対する認識の変化から孤立し言語構造内部だけで自律的に行われるというわけにはいかない。価値観や物の考え方、人間関係の捉え方などその社会や文化における内面的な意識の変化は、それ自体現象として直接にわれわれの面前に現れはしないので、それをじかに観察することはできない。しかし、われわれはこのよう

な内面的な意識の変化を外部現象として現れた様々な事件や事変などの社会的変化の事実を通して推察し把握することは可能である。以下この約700年間の近現代中国社会の変貌ぶりを概観し、社会的変化の事実の中から価値観や人間関係への認識の変化の一端を読み取ることにする。

14世紀以来、中国社会においては、元王朝、明王朝、清王朝、中華民国、そして中華人民共和国へと四回ほど王朝や政権体制の交替が行われ、その間社会組織や人々の社会意識や価値観なども時代の変化と共に大きく移り変わってきた。

13世紀の末頃、宋王朝が北方モンゴル民族との戦いに敗れ、中国において初めての非漢民族による王朝元朝が成立した。約90年に渡る異民族支配が続いた後、1368年に元が滅び、朱元璋により明王朝が打ち立てられた。明王朝は約270年続いた後、北方の満州族によって滅ぼされ、1644年に清王朝が成立し、再び非漢民族による支配が始まった。清王朝は1911年まで約270年続いた。

14世紀から19世紀の末までの間に2回王朝の交替が行われたが、封建君主制という社会制度や組織は基本的にそのまま受け継がれ、儒教典籍の「四書五経」は依然学校教育の中心的な教科で、一般の人々の価値観も「君臣、父子、男女、上下、尊卑」をわきまえる旧来の伝統的な儒教思想、君主思想を継承していた。元、明、清の三つの時代の間に、王朝交替による戦争があったものの、王朝維持の期間には、手工業生産が盛んで社会の発展は緩やかに進み、産業革命のような急激な変化もなく、中国社会は伝統的な価値観の中で清朝の中頃まで比較的平穏な状態が続いた。しかし、清の末期になると事情が大きく変わった。西洋列強の圧力により、門戸開放がよぎなくされ、19世紀中頃西洋文化が中国社会に浸透し始め、伝統的な世界観や価値観に大きな衝撃を与えた。

外的圧力による門戸開放の象徴的な出来事は1842年に起きたアヘン戦争である。アヘン戦争後、西洋諸国による植民地化が進み、人や物が流れ込むにつれ西洋の世界観、価値観、ものの考え方なども中国に押し寄せた。そんな中で中国社会内部でも伝統文化を見直し、革新を求める声が高まった。1862年以後、洋務運動をはじめ中国社会内部でも西洋諸国に倣い近代化を目指す動きが現れた。戊戌変法（1898年）により政治、経済、教育などにおける一層の西洋化が図られたが、強い抵抗に遭い失敗に終わった。1905年に千年以上続いた科挙制度がついに廃止され、儒家典籍の学習を中心とする学校教育の中に、部分的に近代科学の教科が導入された。中国社会は19世紀末から20世紀初めにかけてこのように伝統文化との格闘の中で挫折を繰り返しながら西洋文化の受容を始めた。

1911年に辛亥革命が勃発し、それにより清王朝が崩壊し、翌年中華民国が成立した。辛亥革命により何千年にも渡る君主専制支配にピリオドが打たれた。辛亥革命は、単に政治制度上の変革をもたらしただけではなく、伝統的な世界観、価値観を揺るがし、国民生活の様々な面において「精神上の大解放」をもたらしたと言われている。辛亥革命後、伝統文化への批判が日々激化し、具体化した。1915年頃から伝統文化に対して猛烈な批判を浴びせる新文化運動、文学革命運動が繰り広げられた。1919年、政治、社会の舞台で帝国主義や封建主義に反対し、「民族自決」と「孔子打倒」の旗印を掲げた五四運動が起こり、そしてそれがきっかけで新文化運動が高潮を迎え、伝統文化への攻撃が一層強まった。このような社会的背景の中で、儒教を中心とする伝統的な世界観、価値観、礼儀礼法を尊ぶ旧来の倫理観が大きく揺さぶられた。

その後30年の間に国民革命による北伐戦争や第2次世界大戦、解放戦争など中国全土を巻き込む幾度の戦乱を経て、1949年に中華人民共和国が成立した。その後、共産主義の理念の下で、社会主義改造が計画実行され、土地財産の均等、資産階級の消滅などを目指して計画経済が実施され、農村では徹底した土地没収と均分が行われ、都市では私有資産の国有化が進められた。1958年の「大躍進」運動により一層の共産化が推し進められた。その結果悪平等が助長され、それが原因で全国規模の物不足と飢饉に見舞われた。1966年に文化大革命が起こり、人々の社会意識は更に大きく変化し、人間関係においても「敵か同志か」という階級闘争の影に覆われるようになっていった。文革の中でも1973年に「孔子批判」が行われ、伝統文化は封建社会の産物として徹底的に否定された。1976年に文化大革命が終結し、その後改革開放が始まり、計画経済から市場経済へと政策転換が行われ、中国社会は再び新しい激変の時代に入った。20年間の変革を経た90年代の今日、中国は社会意識において共産主義的なもの、自由主義的なもの、伝統的なものなどが併存し、様々な価値観が混在する社会となった。

激動の近現代史をくぐり抜けたいまの中国社会において、社会主義革命以後、特に文化大革命中に生まれ育った世代の人々にとって、「君臣、父子、男女、上下、尊卑」などの「陰陽」秩序に基づく儒教の礼儀礼法などは遥か遠い昔の存在となったのである。

社会的、政治的な事件や事変は表層に現れた社会変化の一側面にすぎない。われわれは安易に一つ一つの事件や事変をそのまま言語変化の原因として結び付けることには賛成しないが、以上のような表層上の政治的、社会的出来事を通して、その背後に人々の世界観、価値観が大きく変化し、人間関係の理解の仕方もしだいに変わっていったことが想像される。

7. 敬辞の衰退と社会的変化との共振性

4節と5節の調査で、敬辞表現の通時的変化の一面を窺うことができた。しかし、このような変化は、言語現象としてその内部で自律的に行われたのか、それとも、言語外部の社会的変化と連動し他律的に行われたのか。これから、6節で概観した近現代中国社会の歴史的变化に基づいて、全作品に現れた敬辞の分布状況を中国社会の変化と比較しながら、敬辞の変化と社会の変遷との通時的相関性、共振性を探ってきたい。

表6 敬辞上位20位語彙分布値

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
尊辞	14	9	17	17	13	9	12	13	11	9	15	12	14	9	13
%	70	45	85	85	65	45	60	65	55	45	75	60	70	45	65
謙辞	15	13	14	13	12	9	14	13	8	10	11	7	12	8	6
%	75	65	70	65	60	45	70	65	40	50	55	35	60	40	30

	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚
尊辞	8	5	1	3	5	1	1	2	0	1	1	0	0	0	1
%	40	25	5	15	25	5	5	10	0	5	5	0	0	0	5
謙辞	6	4	0	1	3	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0
%	30	20	0	5	15	0	0	0	0	0	5	0	5	0	0

表7 敬辞の通時的変化

(単位名: %)

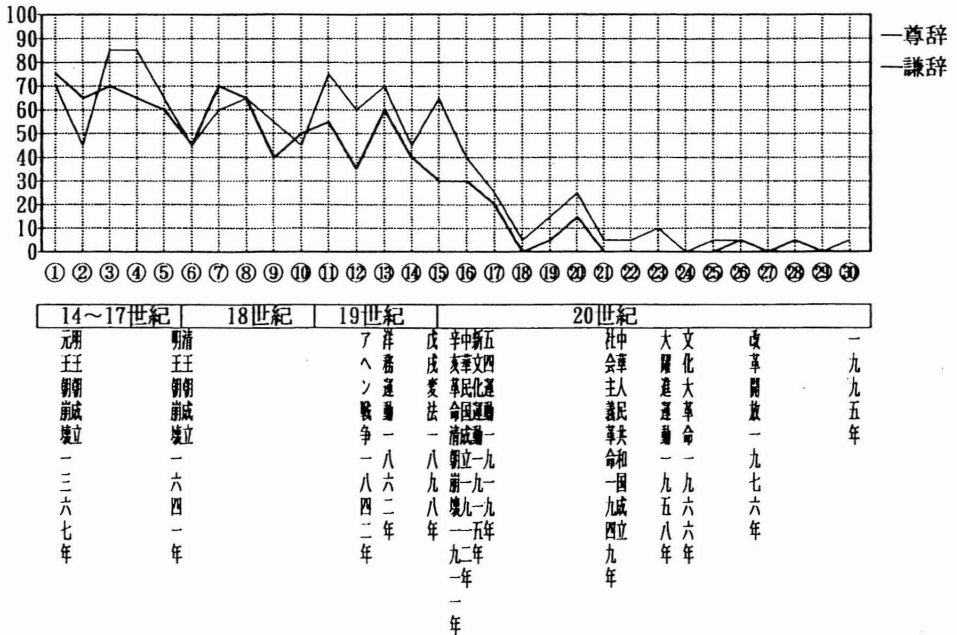


表2と表3に基づいて、作品毎に現れた尊辞と謙辞の数及び上位20位中に占める割合を表6のようにまとめ、そして、表6に基づいて表7のように図式化する。表7では、全作品を等間隔に配列し、その上では上位20位の尊辞と謙辞の出現率をグラフで表示し、その下では時代の流れ、作品①から⑳までの間に起こった社会的変化の出来事を示す。敬辞の通時的変化と年代の推移及びその間に起こった社会的変化との比較を通して、次のような事実が浮かび上がった。

<1> 14世紀から19世紀末までの約500年の間に敬辞の使用に著しい変化は見られなかった。この500年の間はちょうど元、明、清の王朝時代にあたる。その期間に2回も王朝交替が行われ、長期間に渡る非漢民族の支配があったにもかかわらず、表7のグラフが示すように、その間における敬辞使用は、徐々に減少してはいるものの、時代差を感じさせるような顕著な変化は見られない。この現象から異民族支配や王朝交替およびそれに伴う戦乱のような社会的変化は、人々の敬語意識や敬辞使用にそれほど大きな影響を与えなかったことが窺われる。歴史的に見てもこの二回の王朝交替は異民族支配があったとは言え、中国従来の社会組織や伝統的な世界観や価値観などを大きく変えるまでには至らなかったと言える。

<2> 表7で、作品⑮から⑳までの間つまり19世紀末から20世紀初頭にかけて、敬辞は急激な衰退ぶりを見せている。この時期はちょうど清王朝の崩壊、辛亥革命の勃発、中華民国の樹立、そして封建性、伝統文化への猛烈な批判を唱える新文化運動、五四新民主主義運動の発生など、社会構造や社会意識の大変革の時期と重なる。この時期に起こった一連の事件や事変は、孤立した出来事として存在したのではなく、社会全体の中で表層に現れた諸現象の内の一つであり、その背景に、近現代中国社会における世界観、価値観の大転換が行われたことを意味するものである。敬辞の衰退と中国社会の変遷との間に存在する偶然とは言えないこのような通時的共振関係から、今世紀初頭に起こった一連の社会的変化及びその背景となる世界観、価値観の転換は、当時中国社会の人間関係の意識を変化させ、敬辞の衰退を促した重要な要因ではないかと考えられる。

伝統的な敬辞表現は社会主義革命によって衰退したと一般的に考えられがちだが、表7で示されたように、その著しい変化は今世紀初頭つまり辛亥革命勃発や清王朝崩壊の時からすでに始まったことが分かる。

<3> 敬辞表現の量の減少は質の変化をもたらし、作品㉑以降になると、敬辞体系そのものが消えるに至った。謙辞はすっかり消滅し、尊辞も「貴姓」という個別の痕跡が残るだ

けとなった。その時期はちょうど社会主義革命以後の約45年間と重なる。〈2〉の分析ですでに分かるように、社会主義革命そのものは敬辞の衰退を促した直接の原因ではないけれども、社会主義国家になってから敬辞はすっかり消失し、二度と復活することがなかったこともまた事実である。社会主義革命により敬辞使用の社会的基盤が更に崩され、その復活が一層不可能になったと言えよう。

〈4〉文化大革命も敬辞消失の一因と見なされやすいが、表7で明らかのように、文化大革命が起きた1966年頃には敬辞は事実上すでに消滅していた。文化大革命が呼称表現など他の言語現象に大きな変化をもたらしたことは経験的によく知られているが、伝統的な敬辞体系に限って言えば、文化大革命がその衰退と崩壊の一因と認めることはできない。

8. 結び

以上の調査結果に基づいて、中国語敬辞体系の衰退プロセスは、次の三つの段階に分けて説明することができる。

一. 繁栄期：14世紀から19世紀末までつまり元、明、清王朝時代にあたる。作品では①から⑭までとなる。この時期には二項対立の価値含意に基づく敬辞体系が確立していた。この時期に作品による敬辞使用の個別差は存在するものの、表7のグラフが示すように、その使用率の幅は、大体40～80%の間に揺れ動くもので、はっきりした時代差は見られない。

二. 衰退期：20世紀前半つまり中華民国時代にあたる。作品では⑮から㉑までとなる。この時期には、敬辞表現は量的にも激減し、その修飾機能、共起語彙の範囲も著しく縮小し始めた。敬辞体系がこの時期において崩壊の一途を辿った様相を表7からはっきり読み取ることができる。

三. 消滅期：20世紀後半、つまり中華人民共和国時代にあたる。作品では㉒から㉓までとなる。この時期には、表7が示すように体系としての敬辞現象はもはや存在しなくなった。

以上、実証研究の立場から、14世紀から20世紀90年代までの間に書かれた30点の長編小説における会話資料に基づいて、中国語の敬辞体系の衰退プロセスを記述し、それと中国社会の変化との間に存在する相関性、共振性について考察した。言語の通時的変化は、すべてある種の音韻変化のように言語現象内部で自律的に行われるものではなく、その中に他の社会的現象にリンクされ、社会的変化に敏感に反応しながら変化していく他律的な側

面も存在している。この研究は社会的変化に連動し依存する言語変化の他律性に関する一証拠を提供したことになるのではなかろうか。

謝辞

本論文は第5回社会言語学研究会での口頭発表論文をもとに修正加筆したものである。本研究は財団法人松下国際財団による助成研究の一部である。当財団のご支援に対して感謝の意を表したい。

参考文献

- Bloomfield, Leonard 1933 *Language*. London: George Allen and Unwin.
- 福島直四郎 1934 『比較言語学』 明治書院
- 顧 日国 1992 「礼貌, 語用与文化」 『外語教学与研究』 4月号 北京外国語学院 10-17
- 姫田光義・阿部治平・上原一慶・高橋孝助・前田利昭 1982 『中国近現代史』 東京大学出版会
- 井出 祥子・彭 国躍 1994 「敬語表現のタイポロジー」 月刊『言語』 9月号 43-50
- 井上 史雄 1985 『新しい日本語 <新方言>の分布と変化』 明治書院
- Labov, W. 1963 The social motivation of sound change. *Word* 19:273-307
- 劉 和平他編 1992 『中国近現代史大典』 中共党史出版社
- Sachiko IDE/Guoyue PENG 1996 Linguistic Politeness in Chinese Japanese and English from A Socio-Historical Perspective 『言語学林1995~1996』 三省堂 971-983
- 彭 国躍 1993 「近代中国語の敬語の語用論的考察」 『言語研究』 日本言語学会 117-183
- 1995a 「近代中国語敬語体系の理論的枠組み 陰陽世界観に基づく対人関係の認知システム」 『富山大学人文学部紀要』 第23号 富山大学 133-166
- 1995b 「『金瓶梅詞話』の年齢質問発話行為と敬語表現 社会言語学的アプローチ」 『言語研究』 第108号 日本言語学会 24-45
- 1995c 「近代中国語の敬辞とその被修飾成分との共起関係 親族名称を中心に」 『中国語学』 第242号 日本中国語学会 104-114
- 1996a 「近代中国語敬辞の文脈条件の一考察」 『富山大学人文学部紀要』 第24号 富山大学 155-169

—— 1996b 「近代中国語敬辞の意味ネットワーク」『富山大学文学部紀要』第25号
富山大学 211-220

真田 信治 1979 『地域語への接近 北陸をフィールドとして』 秋山書店

真田 信治・渋谷 勝己・陣内 正敬・杉戸 清樹 1992 『社会言語学』 桜楓社

石 昌渝 1993 『中国小説源流論』 三聯書店

蘇 徳昌 1982 「中国語 日中の称呼」『講座日本語学12 外国語との対象Ⅲ』 明治書院

—— 1987 「人間関係と敬語 日中の比較論的視点から」『東北大学日本文化研究所研究報告』第23集 89-115

藤堂 明保 1974 「中国語の敬語」『敬語講座第8巻 世界の敬語』 明治書院 139-162

(1997年10月20日受付, 1997年11月20日再受付)